

浜松城跡 6 次

2012 年 3 月

(財) 浜松市文化振興財團



## 例　　言

- 1 本書は、浜松市中区元城町 100-2 で実施した浜松城跡の発掘調査にかかる報告である。当発掘調査は、浜松城跡の遺構残存状況を確認するために実施した。調査は、浜松市都市整備部公園課の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市市民部文化財課が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。
- 2 浜松城跡は、過去において 5 次にわたる発掘調査及び数回にわたる工事立合いが行なわれている。今回報告する調査を第 6 次調査とする。
- 3 当発掘調査にかかる契約期間は、平成 23 年（2011）7 月 15 日から平成 24（2012）年 3 月 16 日までである。このうち現地発掘調査は、平成 23 年（2011）8 月 17 日から 8 月 29 日の間に実施した。調査面積は 12m<sup>2</sup>である。
- 4 現地発掘調査は影山重広、首藤久士（浜松市文化財課）が担当し、吉田悠歩（浜松市文化振興財団非常勤職員）が補助した。
- 5 整理作業は首藤久士が担当し、吉田悠歩の補助を得た。本書の執筆と編集は、首藤久士が行った。
- 6 調査の記録と出土遺物は、浜松市文化財課が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 8 本書では参考文献等の表記において以下のような略称をもちいる。  
教育委員会→教委、（財）浜松市文化振興財団→浜文振
- 9 本書の作成にあたり、三浦正幸、向坂鋼二各氏の協力を賜った。

## 浜松城跡 6 次

## 目　　次

### 例　　言

第 1 章　序　論 ..... 1

第 2 章　調査成果 ..... 3

第 3 章　総　括 ..... 8

### 図　　版

# 第1章 序論

## 1 経緯と立地

**調査にいたる経緯** 浜松城跡は、天守曲輪周辺部が浜松市指定史跡として保護されている。1950年に浜松城公園として整備されて以来、1958年には復興天守が建てられるなど、市のシンボルとして長年市民に親しまれてきた。2009年、浜松城公園歴史ゾーン整備基本構想（主管：浜松市公園課）が策定され、天守門と富士見櫓の想定復元が検討された。この計画にあたり、考古学的見地からデータを収集するため、2009年に発掘調査（4次調査）を実施した。この調査では二箇所ともに建物の礎石を確認した（浜文振 2010）。2010年には両建物の正確な復原にいたるため、天守門跡については二階部分にあたる石垣上部、富士見櫓跡については4次調査地の西側部分について、発掘調査（5次調査）を実施した。調査の結果、天守門跡では二階部分の規模がほぼ確定され、想定復原にかかる重要なデータを得る事ができた（浜文振 2011）。

天守門の想定復原工事にあたっては、建物の強度を維持するための基礎構造を検討する必要があることから、浜松市公園課と浜松市文化財課が該当部分の取り扱いについて協議を重ねた。そして2011年、天守門跡の櫓台部分において、石垣の築造時期や櫓台内部構造についての確認調査を実施することが決定された。発掘調査は（財）浜松市文化振興財團が受託し、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が指導にあたった。現地調査は2011年の8月17日から8月29日にかけて実施した。調査面積は、天守門跡南地区7m<sup>2</sup>、同北地区5m<sup>2</sup>の合計12m<sup>2</sup>である。

**浜松城の立地** 静岡県西部の天竜川流域には、16世紀後半を中心とした城郭群が数多く分布している。戦国期には、遠江の支配権を巡り戦国大名が城郭の争奪戦を繰り広げており、その中心の一

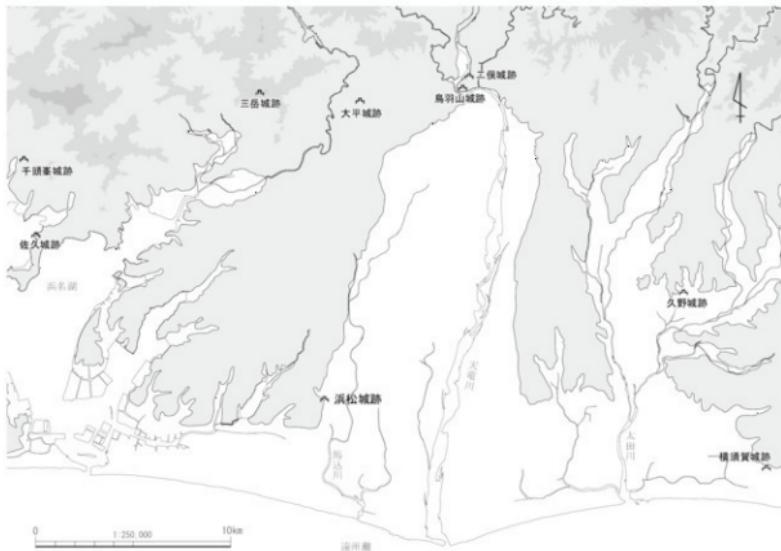


Fig.1 浜松城跡の位置

つが浜松城である。浜松城は天竜川下流西岸の洪積台地に立地する。浜松城の前身は引馬城であるが、築城者については諸説あり確定されていない。引馬城の城域は、江戸時代の古絵図に古城と記されている小規模な円形曲輪が4つ連続する区域と考えられる。元亀元年（1570）に入城した徳川家康により城名が浜松城へ改められ、城域が拡張された。作左曲輪から16世紀後半の遺物が出土していることから当地域まで拡張が及んだことが分かる。その後、家康は小田原征伐により関東移封となり、変わって豊臣系大名である堀尾吉晴が城主となった。堀尾氏時代に石垣と瓦葺建物が出現し、近世的な城郭として整備される。浜松城は、江戸時代を通じて短期間で城主が入れ替わるとともに三の丸が整備され、東海道沿いに城下町が形成されるなど変遷をとげ、現在見られる姿となつた。なお過去には、浜松城内および作左山から須恵器が出土するとともに古墳（横穴とされている）の一部が調査されていることから、城域拡張以前の丘陵には古墳群が存在していたと考えられる。

## 2 調査経過

**調査区設定** 今回の天守門跡における調査は、櫓台石垣基礎構造の解明を目的に、南北の両櫓台上に調査区を設定した。測量にあたっては国家座標を採用し、浜松城公園内に設けられた基準点とともに計測を行なった。

**調査経過** 表土を人力で除去した後、裏込石が埋没している層位まで掘り下げ、裏込石の確認に努めた。南北の調査区とともに壁面を精査し、現存の櫓台盛土の堆積状況を確認した。調査期間中の2011年8月22日には、専門委員による現地指導があり、調査成果に対する助言が寄せられた。調査終了後は埋戻しを行い、旧状に復した。



Fig.2 調査区位置図

## 第2章 調査成果

### 1 検出遺構

**天守門跡南地区** (Fig.4) 天守門跡の南側櫓台において、南北約4m、東西約5mのT字状で幅約0.7mの調査区を設定した(調査面積は約7m<sup>2</sup>)。この調査区を天守門跡南地区と呼称する(以下、南地区と略す)。調査区全体が2010年度調査区と重複しており、表土下約0.1mの間には埋め戻し土が見られた。裏込石については、3方ともに表土下約0.2mで検出され、奥行きは約1mであった。裏込として使用された石は東端がやや小さく、直径約5cmのものが主体となるが、他の2箇所では直径8cm～10cmのものが主に詰められていた。また、南及び東壁の観察からは、水平堆積が見られた。1層、2層及び7層では、瓦が混入している。南壁では2層の中央落ち込み部分を挟むように、西側で3～6層の水平堆積が見られる。一方東側では、8層～15層について西方方向へ傾斜堆積が認められ、おおよそ赤褐色粘土と茶褐色粘土を交互に積み上げる傾向がある。

以上のことから、南壁の観察では大きく3時期に分けられる。①1層及び2層が最も新しい時期に構築された地層である。そのうち2層からは太田氏時代と思われる桔梗文軒丸瓦が出土している。②3層～6層の水平堆積及び、裏込石に接し傾斜している7層が近接した時期に構築されたと考えられる。③8層～15層がほぼ揃って西へ傾斜する様子から比較的近似した時期の構築と推定できる。また、②と③の切り合い関係から、③構築後のある段階で②に該当する西側石垣および櫓台の西半が崩壊し、積み直したと想定できる。

西壁の様子からは堤状に23層～25層を置いた後、裏込石との間を充填していく構築過程が想定できる。前述の南壁①の段階が1層、2層、16層に対応し、②は3層～5層、17層に相当すると考えられる。また、櫓台西半の崩壊が調査区中ほどまで及んでいたと考えられる。18層～25層が西壁で捉えられた最も古い時期の土層と考えられるが、南壁③との前後関係は不明である。

**天守門跡北地区** (Fig.5) 天守門跡の北側櫓台において、南北約1.5m、東西約5.5mのT字状を呈する幅約0.7mの発掘調査区を設定した(調査面積は約5m<sup>2</sup>)。この調査区を天守門跡北地区と呼称する(以下、北地区と略す)。南地区同様、調査区全体が昨年度調査区と重複しており表土下約0.2mまでは、埋め戻し土が見られた。裏込石については東端を除く2方で確認され、いずれも瓦片の混入がみられる。表土下約0.2mで検出され、奥行きは約1mであった。裏込として使用された石は直径8cm～10cmであった。西及び北側壁では、いずれも水平堆積が観察できた。

### 2 出土遺物

今回確認されたものは大部分が瓦である(Fig.6)。1・10以外は昨年度調査の埋め戻し土中(1層)より出土している。1～3は天守門跡南地区、4～10が天守門跡北地区よりの出土である。1は軒丸瓦の瓦当部分である。2層より出土した。大部分が欠損しているが、桔梗文の一部である。2・4～6は丸瓦である。2は布目痕を持つ。3は目板瓦(堀瓦)である。4は布目痕が見られる。5・6は布目痕及び吊り紐痕が観察できる。7は表面に波状の粘土紐を貼り付けている。裏面は条線がある。8は面戸瓦と思われる。両面がナデされている。9は釘である。10は無文鏡である。廃土から出土した。

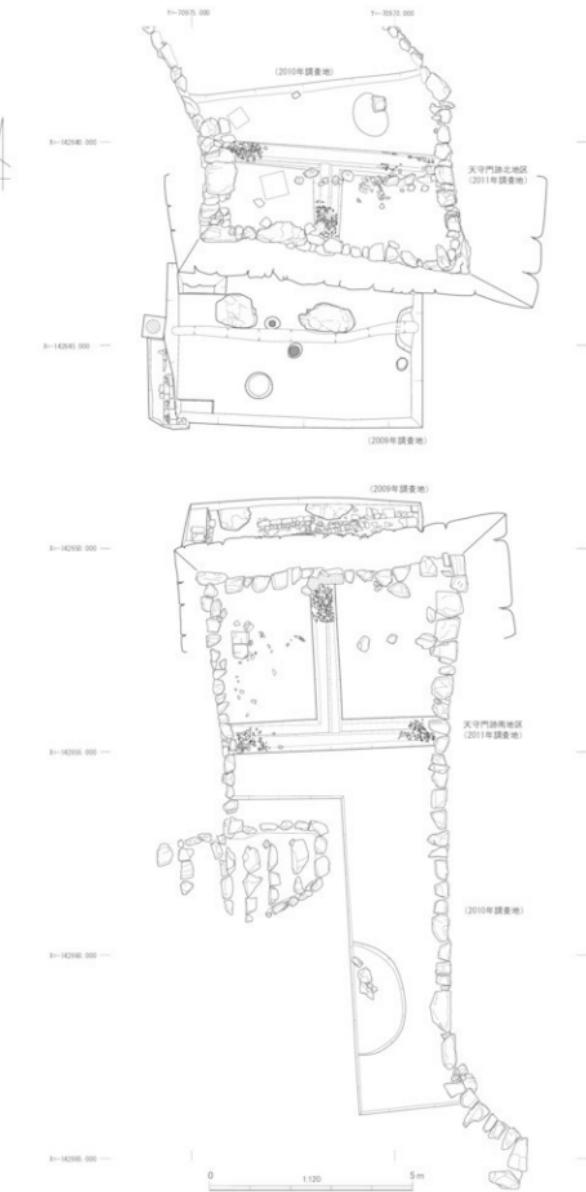


Fig.3 天守門跡全体図

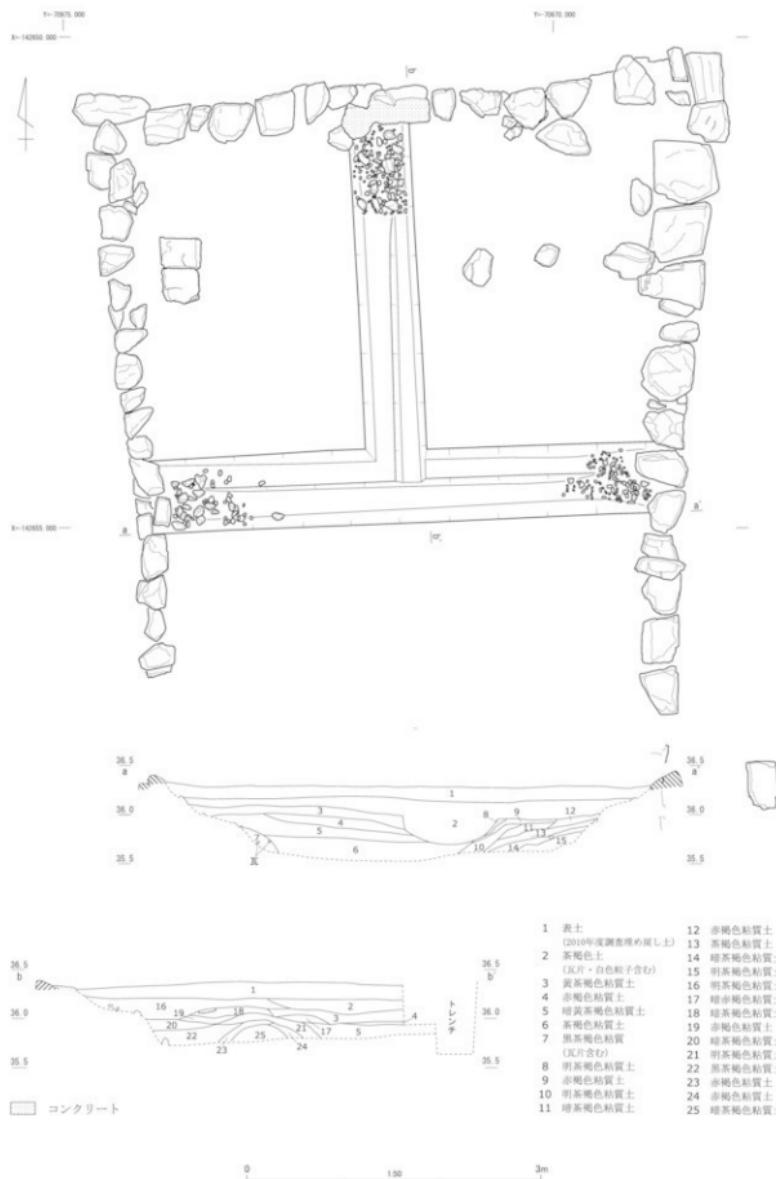
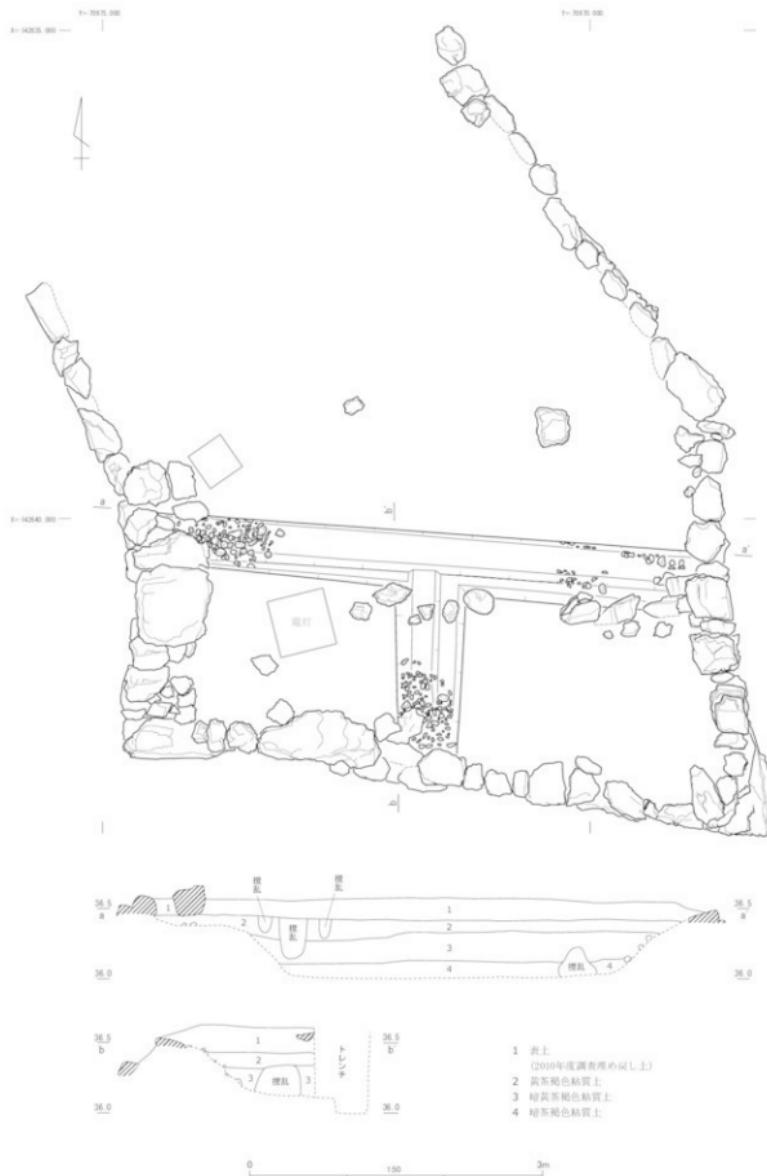


Fig.4 天守門跡南地区検出遺構



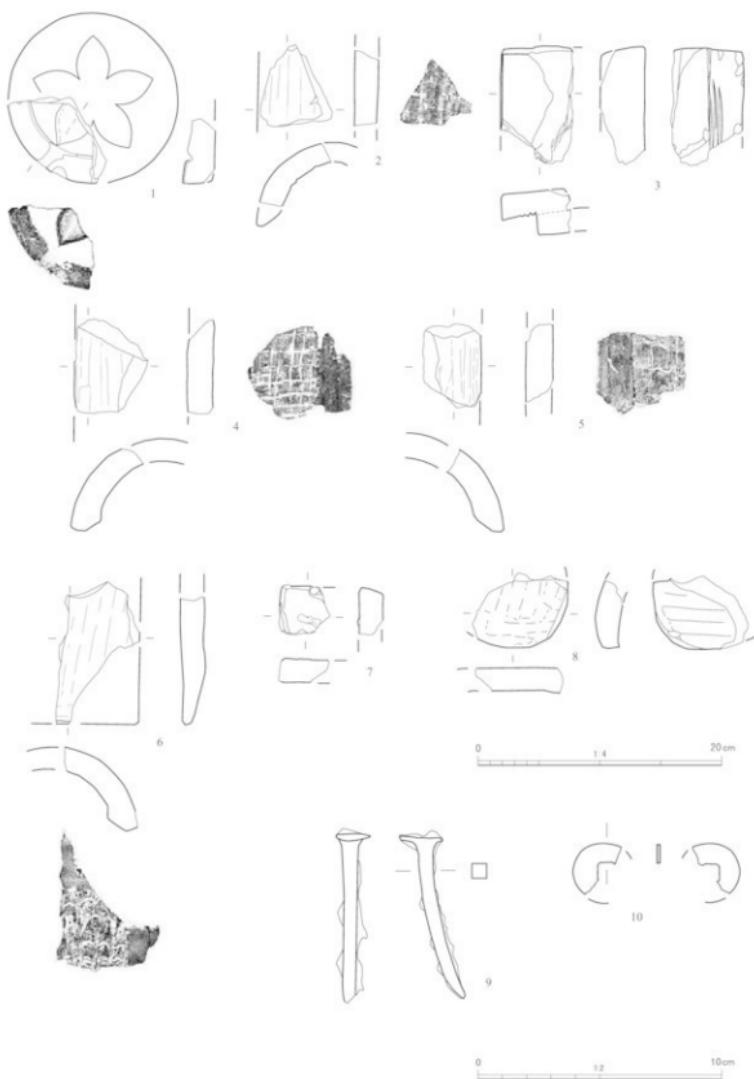


Fig.6 天守門跡出土遺物

### 第3章 総括

今回の調査によって、櫓台石垣内部の裏込め石は、比較的良好な状態で残存していることが判明した。裏込めは拳大の小礫を用い、石垣の内側1mほどの幅で施されている。なお、今回の調査は試掘溝による部分的な調査であることから、櫓台の下部構造について不明な点が多く残ることは留意しなくてはならない。

裏込め石のさらには内側は、盛り土によって櫓台が構築されている。この盛土断面の観察によって、部分的に石垣が崩落し、一部は積み直しを経ている可能性が指摘できる。櫓台南側の西石垣の内部については、充填されていた石材が小さく、盛り土中に瓦が混入している状況がみられ、櫓台北側の東石垣の内部では、裏込め石自体が検出されなかった。これらの部分については、石垣が再構築されたとみてよいだろう。これらの石垣の積み直しの時期については、明確な出土遺物に恵まれなかつたため、確定させることができない。現状では、出土品に近代以降の遺物が全く見られないことから、石垣の積み直しは江戸時代の出来事であったと判断しておきたい。石垣が積み直された時期を考える上では、安政大地震（1854年）の被害を記した絵図に、多くの石垣が孕んだとの記述がある点は看過できない。櫓台石垣の積み直しも、この地震後に行われた可能性がある。

Tab.1 浜松城跡出土軒丸瓦における諸属性

資料名	出土位置	凹面						凸面			群別
		タタキ痕		コビキ		布（編）目		内面圧痕	内面調整		
		あり	コビキA	コビキB	細目	粗目	吊り縫	横縫取	内タタキ	指ナデ	
桔梗紋軒丸瓦	太田氏在城期（1644～1678）										
6次 Fig.6-1	天守門跡（南地区）										Ⅱ

桔梗紋軒丸瓦 太田氏在城期（1644～1678）

6次 Fig.6-1	天守門跡（南地区）										Ⅱ
------------	-----------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---

#### 丸瓦

6次 Fig.6-2	天守門跡（南地区）				○						(1)
6次 Fig.6-4	天守門跡（北地区）				○				○		(1)
6次 Fig.6-5	天守門跡（北地区）				○		○				1
6次 Fig.6-6	天守門跡（北地区）				○	○					1

#### 凡例

バーレン内の情報は不確実であることを示す

○：古相の属性、●：新相の属性

布（編）目痕の差異 細：10単位以上/cm 粗：6～7単位以下/cm

群別の時期 Ⅰ期：16世紀末 Ⅱ期：17世紀前半 Ⅲ期：17世紀後半～18世紀後半 Ⅳ期（仮）：18世紀後半以降

Tab.2 出土遺物観察表

Fig	番号	取上番号	地区	種別	細別	残存(%)	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	色	調	備	考
6	1	1	天守門南	瓦	軒丸瓦	5			2.5	黄灰			
6	2	2	天守門南	瓦	丸瓦	5			1.4	暗灰	布目		
6	3	2	天守門南	瓦	聊瓦	5			3.6	暗灰			
6	4	4	天守門北	瓦	丸瓦	5			2.1	灰	横縫取り	細目	
6	5	4	天守門北	瓦	丸瓦	5			2.2	灰	細目	吊り縫	
6	6	4	天守門北	瓦	丸瓦	5			2.0	灰	細目	吊り縫	
6	7	4	天守門北	瓦	平瓦	5			1.9	灰			波状粘土縫
6	8	5	天守門北	瓦	圓口瓦	5			2.0	灰			
6	9	3	天守門北	鉄製品	釘		6.7	1.8					一辺0.6
6	10	6	天守門北	鉄貨	無文銘				0.1				直径2.5



1 天守門跡南地区 南壁（北西から）

2 天守門跡南地区 東壁（南西から）



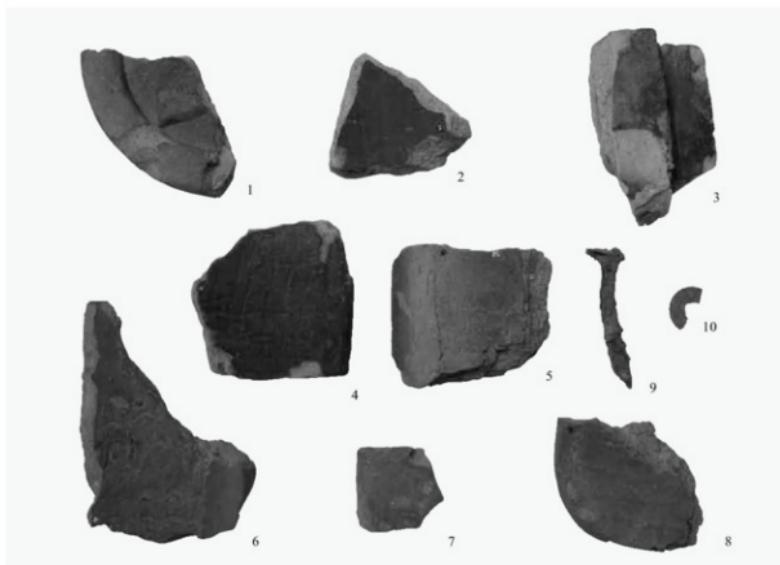
3 天守門跡南地区 北端裏込（南西から）

4 天守門跡南地区 西端裏込（北東から）



1 天守門跡北地区 西端裏込（北東から）

2 天守門跡北地区 南端裏込（北東から）



3 出土遺物

## 報告書抄録

書名(ふりがな)	浜松城跡 6 次 (はままつじょうあと 6 次)							
編著者名	首藤 久士							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	(財)浜松市文化振興財団							
発行年月日	2012年3月16日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡	静岡県 浜松市中区 元城町	22202	01- 04- 13	34 度 47 分 30 秒	137 度 45 分 15 秒	2011 年 8 月 17 日 ～ 8 月 29 日	12 m <sup>2</sup>	確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項				
浜松城跡	城跡	安土桃山時代 江戸時代	釘・瓦	天守門跡両櫓台石垣の裏込石を確認				

### 浜松城跡 6 次

2012年3月16日

---

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市市民部文化財課

(浜松市教育委員会の補助執行機関)

〒430-0946 浜松市中区元城町103-2

発行機関 財團法人 浜松市文化振興財団

印 刷 中部印刷株式会社

---

# Hamamatsu Castle

The 6<sup>th</sup> excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 16<sup>th</sup>-19<sup>th</sup>  
Century Castle in Western Shizuoka, Japan



March, 2012

Hamamatsu Cultural Foundation